

大学生のキャリア展望 をもとにした海外留学 支援制度の在り方

—日本の四年制大学にお けるインタビュー調査よ り—

杉野 竜美^{*}
武 寛子^{**}
正楽 藍^{***}

はじめに

日本人の海外留学者数の減少に警笛が鳴らされている。図1は、日本人の海外留学者数の推移と留学先の上位国を表したものである。2004年の82,945人をピークに2010年には58,060人へと減少しており、これは約3割の減少である。これは、アメリカ合衆国への留学者数の激減が全体を押し下げている。その要因として、アメリカ合衆国の授業料の高騰や日本経済の停滞による経済格差の拡大、日本企業の収益悪化に伴う海外派遣の取り止め等が挙げられる。一方で、中国やイギリス、オーストラリア等への留学者数は微増しており、アメリカ一辺倒であった日本人の留学先が多様化していることも事実である。しかしながら、海外留学者数全体の減少を食い止めるほどの威力はない。

日本人留学生在が減少しているというのはものの、留学経験者を想定したグローバル人材の育成は、日本の高等教育機関および社会の課題である。海外留学によって何を獲得させ、その結果どのような人材を育成するのかを検討する場合、グローバル人材の概念を整理した次の3要素が鍵となる¹⁾。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、

協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人とし

てのアイデンティティ

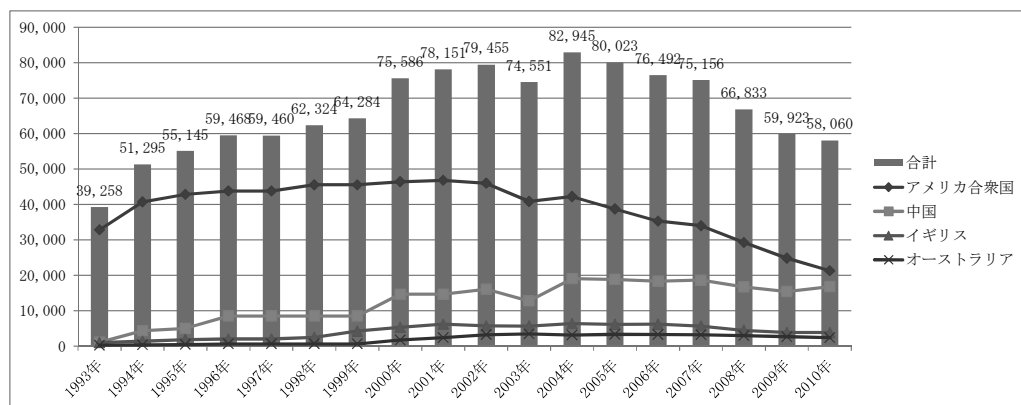
海外留学によってこれら3要素を獲得さ

* 神戸大学大学院国際協力研究科部局研究員

** 愛知教育大学教員養成開発連携センター講師

*** 香川大学インターナショナルオフィス講師

図1. 日本人の海外留学状況 (1993年－2010年)



出典：文部科学省「日本人の海外留学状況」各年度発表資料より作成

せ、グローバル人材、つまり、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」へと育て上げることが求められている（文部科学省 2011、p. 3）。

本稿は、日本の四年制大学に在籍する学生の海外留学志向（海外留学についてどのように考えているのか）に着目し、彼らの海外留学を促進するための大学における制度の在り方を探ることを目的とする。学生の海外留学志向を形成する諸相を考察するために、神戸大学と香川大学において学生へのインタビュー調査を実施した。その分析の結果、以下の3点が明らかになった。第一に、「語学力」の重要性が再確認されたが、それは単に

外国語を運用するためのものではなく、「専門知識」や「異文化経験・理解」と結びついて「コミュニケーション力」を形成するものである。これは、前述の高等教育や社会が課題とするグローバル人材の育成と共通するものである。第二に、学生たちは、この「コミュニケーション力」が就職活動や将来の職業で役立つと考えていることが分かった。第三に、このような海外留学を志向するプロセスにおいて、「身近な留学経験者」が居ることや、「外国人との交流」があることが大きなきっかけとなっていることなどが明らかになった。

本稿の構成は以下の通りである。次の第1節では、日本人学生の留学に関する先行研究を整理するとともに、これまで議論されてこなかった点を明らかにする。第2節で本研究の調査方法を概説し、第3節以降で調査結果を分析していく。最後に、日本人学生の海外留学を促進するための大学における制度の在り方を考察する。

1. 日本人学生の留学に関する先行研究

日本人学生の留学に関する先行研究は多数あり、これらを整理すると、日本人学生の海外留学志向を分析したもの²と、大学の国際化に向けた教育体制に関するもの³に分類することができる。この分類に従って、これまでの先行研究を整理すると次の4点が明らかにされている。前者として、第一に、学生は留学することで良い就職の機会を逃すかもしれないと考える傾向にあり、そのことが留学を躊躇させる原因の一つになっている（船津・堀田 2004、井口・曙 2003）。第二に、学生が外国人留学生と交流することはのちの海外留学志向に影響を与える傾向にある（河合・野口 2010）。後者として、第三に、外国語運用能力の向上や異文化適応能力の向上を目指した教育指導が、留学への不安を軽減させる効果があると期待されている（高濱・田中 2009）。第四に、日本人学生の海外留学を促進するためには、奨学金など学生への経済的支援を充実させることに加えて、留学先となる国や地域の治安情報を適切に開示することが有効である（田中 2010、堀田 2010）。

上記の先行研究を踏まえ、拙稿（2013）では大学間の比較に焦点を当てて学生の海外留学志向を分析した。ここでは、日本の大学生が海外留学に対する意識をどのように形成しているのかを分析し、海外留学者数を増加させるための大学の体制や制度の在り方を検討した。その結果次のことが明らかになった。

①香川大学と神戸大学の学生は、留学志向に関係なく留学は将来の職業に役立つと考えて

いる。しかし、それは留学に対して消極的な層よりも積極的な層において、また、香川大学よりも神戸大学において顕著に見られるものである。②これまでの海外渡航経験の有無と海外留学志向の関連性について、全体の傾向として関連性は低いと言える。しかし、神戸大学の積極層においては、海外渡航経験の有無と留学志向の関係が見られた。③海外留学をするうえで学生が問題と考えることは、留学費用と語学力である。そして、海外留学によって生じる留年への不安が、神戸大学の浮動層（準備済、未準備）で見られた。④語学力に対する学生の自己評価は、両大学とも、読む力については高い一方で、話す力については低い。ただし、香川大学では層別に偏りが見られるのに対し、神戸大学では回答が分散していた。⑤学生が大学に期待する留学促進制度として、両大学とも、奨学金、協定校以外の大学に留学した場合の単位認定制度、外国人留学生との交流の機会の充実を求めている。これらを踏まえ、将来の職業と関連させた、具体的な目的意識を形成する教育支援、外国語によるコミュニケーション力の向上に特化した教育支援、奨学金情報の周知徹底をはかること、の3点を学生の留学を後押しする政策として提案した。

拙稿と同じく学生の視点から大学の国際化体制を見直す先行研究として、京都大学国際交流センターによるものが挙げられる。同センターでは学生の留学志向を把握するために2002年度より組織的に国際交流の実態を調査し、学生へのアンケート調査、インタビュー

調査を実施している。野口（2009）は、留学志向と外国語能力が関連することに着目し、学生にとって外国語能力の重要性を認識する体験⁴の有無が留学志向と外国語能力の高さ／低さに関係すると考察している。また河合（2009）は（1）文系学生・理系学生と比べて理系学生は学部留学に対する留学志向が低いこと、（2）その背景は、明確な動機の不在とカリキュラム、単位互換などの制度上の制約にあること、（3）文系・理系の学生にとっての共通した問題とは、語学力への不安が留学を阻害する要因になっていること、（4）留学に対する情報提供が周知されていないことへの不満を示していることを明らかにした。学生へのインタビュー調査を通じて留学を促進する制度として、（1）入学後の早い時期に留学に関する情報を提供すること、（2）学生の留学志向、学部・院生、文系・理系などの違いに応じた支援を整備すること、（3）学生の外国語能力を高めるための対策を講じること、（4）留学に対する明確な動機をもてるように、留学生との共学の機会を充実させたり、海外留学を卒業要件に入れたりといった学内での国際化整備をより強化すること、を提案している。

留学経験者が留学によってどのように変化したのかを調査した池田（2011）によると、学生は留学によって異文化理解が高まり、主体性や実行力も高まったということが明らかにされた。この調査を通じて池田は学生の留学を促進する制度として、（1）長期間でキャリアを見つめた際、留学経験がいかに有利に

働くかといった留学のメリットを提示すること、（2）留学生との交流、短期留学プログラムを充実させ、学生が外に目を向けるきっかけを大学がつくること、（3）学生のニーズにあった留学プログラムを提供すること、を挙げている。

滋賀大学の森・児玉（2012）による学生の留学志向に関するアンケート調査の分析では、英語圏への留学を志望する学生が多いこと、学生が留学する上で問題だと捉えているのは語学力不足であることが明らかになった。一方で留学目的として語学力の向上を挙げる学生が最も多くなっており、学生は海外に出れば語学力が向上すると安易に考えていることに警鐘を鳴らす。森・児玉の指摘するように、留学の目的を語学力の向上とするのではなく、経験、交流などが留学の目的となるように、留学の前段階として語学力を高めるための方法や教育プログラムの案内を徹底する必要があるといえる。

岩城・野水（2010）による名古屋大学における学生の留学志向に関する調査では、多くの学生が留学に興味があるものの、就職活動の開始が遅れる、お金がかかるなどの理由から留学をあきらめる傾向にあることが指摘された。そこで学生の留学を促進するための制度として、（1）留学に関する情報を周知し、留学を実現するための行動を起こせるようなきっかけをつくること、（2）単位互換を円滑に進められるような制度をつくる、留学経験者の学生との交流を設けるといった学内の環境を整備することで、留学を実現できるよう

に支援すること、(3) 外国語運用能力を高めるための教育プログラムを整備すること、(4) 留学のための大学独自の奨学金制度を充実させること、の4点を提案している。

以上の先行研究を整理すると、学生の留学志向、学生の留学を促進するための制度として、次のことが指摘できる。第一に、留学に関する情報を早期に周知し、留学を実現するための行動を喚起させることが必要である。留学に関する情報を知らないという学生が多いことから、上述の調査を実施した各大学では留学関係の情報を流布し、留学に目が行くような仕組みづくりが求められている。第二に、留学を実現する過程で語学力不足が留学を実現するための足かせになっているということである。第三に、留学を実現させるための体制を一層整備することである。たとえば、単位認定制度など学内規則の改善、短期・長期など学生のニーズにあった留学プログラムの整備、留学生との交流の機会を充実させること、奨学金制度を充実させることなどである。第四に、留学が今後のキャリア形成にとっても有利に働くことを示すということである。多くの学生が留学することによって就職活動に遅れが生じることを心配している。留学を経て就職した学生と交流する機会を設けたり、留学のメリットを提示したりすることで、学生の留学に対するマイナスのイメージを軽減させることが必要とされている。

このように各大学では学生の留学志向を把握するために、アンケート調査による統計的な調査が主に実施されてきた。しかし、その

数値の背景にある学生の内的心情については明らかにされていない。学生が留学に必要な語学力をどのように考えているのか、留学志向がどのように形成されているのかを明らかにすることは、学生の置かれている状況を理解することと同時に学生の留学に対する考えを考察するために必要だと考えられる。

2. 調査の方法と手続

2-1. アンケート調査からインタビュー調査へ

先行研究を踏まえ、本稿では、大学生の内的心情の把握を通して、彼らの留学志向を形成する要因の詳細を考察する目的で、2013年3月～4月インタビュー調査を実施した。これは、神戸大学と香川大学で2012年11月～12月に実施したアンケート調査・分析⁵を、さらに進める形で行ったものである。アンケート調査の末尾に設けたコメント欄の記述をコード分析し、インタビュー調査の質問項目となるコードを精査した。

アンケート調査末尾のコメント回答者（大学別&性別）は、表1の通りであった⁶。

学部別では、発達科学部・教育学部54名、経済学部4名、法学部3名、国際文化学部1名、海事科学部1名、工学部1名、農学部1名である。学年別では、1回生55名、2回生5名、3回生2名、4回生3名であった。留学志向で分けた層別⁷では、決定層0名、準備層6名、未準備層25名、無関心層34名であった。そして、渡航経験のある者30名、渡航経験のない者35名であった。

表 1. コメント回答者 (大学別 & 性別)

	神戸大学	香川大学	合計
男性	32	4	36
女性	26	3	29
コメント記入者合計 (アンケート回答者総数)	58 (325)	7 (274)	65 (699)

これら 65 名のコメントと、アンケート調査で得られた結果を考慮し⁸、インタビュー調査は次の項目を中心に半構造化インタビューを行った。

1. 留 学：留学のイメージや目的
2. 語 学 力：語学力の必要性、その程度
3. キャリア：将来就きたい職業と、留学との関連について。「グローバル人材」のイメージ
4. モ デ ル：身近な留学経験者、外国人(留学生)について
5. 交 流：外国人や外国人留学生との交流

2-2. インタビュー調査対象者概要

インタビュー調査は、協力の要請に応じてくれた 19 名 (神戸大学 10 名、香川大学 9 名) を対象に実施した。このインタビュー調査を実施するにあたり、両大学における調査実施の環境の均一化をはかるために、研究室や教室などの大学施設を使用して実施した。

この 19 名のインタビュー内容をコード分析および内容分析を行い、全体の傾向と構造を把握した後、(決定層と無関心層を除いた) 準備層と未準備層⁹ の 14 名を本稿の調査対象

者として取り上げた (表 2)。分析対象を準備層・未準備層に絞ることで、留学をしたいと考える一方でそれを躊躇させる背景にあるものや、留学について学生はどのような目的遂行を思い描いているのかを考察することができると考えたからである。以下、学生が留学に対してどのような目的を抱いているのかを見てみよう。

3. コミュニケーション力を形成する「語学力+α」

学生に留学目的について確認したところ、最もよく出てきた内容は「①語学力の向上 (10 件)」、「①専門知識の向上 (10 件)」であり、次に「③異文化体験・理解 (7 件)」、「④ (異文化) コミュニケーション (3 件)」、「④職業に役立てるため (3 件)」、「⑥その他 (2 件)」という順で語られていた (図 1)。

本インタビュー調査結果でも、アンケート調査結果と同様に「語学力」の重要性が確認できた。さらに、必要な「語学力」の程度や理由についても明らかになった。学生が「語学力」を必要と考えているのは、単に外国語を運用する能力だけを求めているのではなく、専門知識や異文化体験・理解と結びつい

表 2. インタビュー調査対象者 14 名の概要

ID No.	所属大学	性別	学部	学年	層
KO- 22	神戸大学	男	法学部	3 回生	未準備層
KO- 31	神戸大学	男	発達科学部	3 回生	準備層
KO- 81	神戸大学	男	経済学部	3 回生	準備層
KO-115	神戸大学	男	経済学部	4 回生	未準備層
KO-187	神戸大学	女	発達科学部	2 回生	準備層
KO-189	神戸大学	男	発達科学部	1 回生	未準備層
KO-249	神戸大学	男	発達科学部	3 回生	未準備層
KO-250	神戸大学	女	発達科学部	1 回生	未準備層
KA- 4	香川大学	女	工学部	1 回生	未準備層
KA- 72	香川大学	男	法学部	1 回生	準備層
KA- 77	香川大学	女	経済学部	1 回生	未準備層
KA-207	香川大学	女	法学部	1 回生	未準備層
KA-212	香川大学	女	医学部	3 回生	未準備層
KA-232	香川大学	女	経済学部	1 回生	未準備層

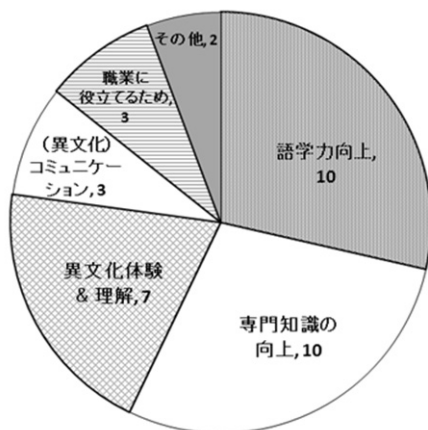
たコミュニケーション力を形成することが重要だと考えている。留学志向とコミュニケーション力の向上が関連していることは、すでに拙稿（2013）においても指摘し、この点に着目した教育支援の重要性について言及した。インタビュー調査を通じて、学生がコミュニケーション力を高める必要があると考える背景として、これを形成するプロセスに身近な留学経験者や外国人との交流が大きくかかわってきていることや、これが将来の職業と関連を持って捉えられていることを確認できた。つまり、学生は留学目的として語学力と専門知識、あるいは語学力と異文化経験・理解を高めることを通じて、自身のコミュニ

ケーション力を高め、留学を通じた経験を将来の職業に役立てたいと考えているのである。

3-1. 語学の運用能力

アンケート調査において学生自身が語学力の「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」に対してどのように自己評価しているのかを分析した結果、学生は「読む力」には自信があるものの、「話す力」にはあまり自信がないということが明らかになった（拙稿 2013）。語学力と留学志向の関連について、京都大学国際交流センターの調査においても、語学力への不安が留学促進を阻害する要

図2. 留学目的（インタビューのコード分析）



因であると指摘されている（河合 2009）。

では、留学に必要な語学の運用能力について、学生はどの程度の語学力が必要だと考えているのだろうか。インタビュー内容を整理すると、留学に必要な語学の運用能力は「現地で運用できる高いコミュニケーション力」と「授業で追いつくための語学力」の二つに集約できる。

まず、「現地で運用できる高いコミュニケーション力」について、次のように語っている。

「やっぱ最低な、コミュニケーションをちょっとぐらいとれるぐらいはなかったら、なんか何もできないというか。話しかけられるん待って、けど話しかけられても何も答えられなくてだったら、相手にも失礼だし。」（KA-207）

「日常会話を普通にできた方が、無理なく過ごせるんじゃないかなって思いま

す。」（KA-4）

（外国人との共同生活を経験して）

「なんか、あれって、英語難しいわって思っ。全然自分しゃべれないんだ、みたいな。中高で6年間英語やってたのに。…中略…留学いったらスカイプ上でしか友達いないわけだから、精神的にやばくなるかなって思っ。ちゃんと友達つくるためにも英語できるようにならないと。やっぱ友達とか周りの人がいなくなっちゃうんじゃないかなって。こわいなーって。」（KO-187）

「生活していく上で、語学力は必要になってくるので、留学行って、海外で生活するっていうんでしたら、必要最低限の英語力っていうのは必要だと思いますね。」（KO-115）

このように、学生は留学に必要な語学力として、日常会話といえども、現地で求められる高度な運用力の必要性を強く感じている様子が確認できた。

次に、「授業で追いつくための語学力」として以下のように語っている。

「論文を書ける。アカデミックなライティングとアカデミックなリスニング、アカデミックなリーディング。正直、日常会話じゃなくてこの3点ができたら行きたくないって思っています。」(KO-81)

「向こうの授業そのまま受けたいっていうのがあるのと。授業は英語で受けたいっていうのがあります。向こうで、イギリスの話ですけど、働くことをイメージしているので。あと、心理学って言うことで、向こうの言葉、僕のネイティブでない言葉から向こうの心情とかを読み解かないといけないうことを考えると、ある程度語学力がないとつらいのかなって。」(KO-31)

これらは、留学によって専門知識・技術を獲得することを想定しており、ある種の「気負い」を感じるものである。森・兎玉(2012)の調査分析では、語学力の向上を留学目的としている学生の、海外に出れば語学力が向上するという安易な考えに警鐘を鳴らしていたが、本インタビュー調査分析では、「留学目的＝語学力の向上」が必ずしも“安易”に結

びついているものではないことを示している。

また、前述の「ちゃんと友達つくるためにも英語できるようにならないと。やっぱ友達とか周りの人がいなくなっちゃうんじゃないかなって。」(KO-187)というように、一見、語学が出来ないことによる現地での生活を不安視している語りだが、その背景には語学力が人間関係の構築に大きくかかわっていることを示している。この語りのように、人間関係の構築には語学力は必須である。しかし、それだけではなく、自ら伝えようとする力、一所懸命に伝えようとする身振り・手振りなどを通じて、相手とコミュニケーションをはかることが求められる。学生が現地での生活で問題に直面した際、その問題を解決するために、誰に、どのように伝えたいのか、そのための問題解決能力を高めることを目的とした(語学だけに特化しない)留学準備教育を提供することが、学生の語学力に対する不安を軽減させることができるのではないだろうか。本分析結果は、異文化適応能力を上げることを目的とした教育指導が、留学への不安を軽減するという高濱・田中(2009)による報告を支持しているといえよう。

3-2. 語学力+専門知識

インタビュー調査では、「語学力の向上」とともに「専門知識の向上」について同時に回答するケースが多々見られた。これを説明する代表的な事例が以下のKO-22とKA-212である。

(留学目的について)

「語学の習得。あとは、やはり今の専門分野の勉強かなって感じですね。」(KO-22)

(留学のイメージについて)

「語学留学、その国の言葉を勉強すること。あとは、自分の専門性を深めるために、海外に行って、その専門を経験することによって、視野の広いことを学ぶ。専門性を極めることと語学を極めることと、なんか2つあるイメージです。…中略…専門の方に行ったら語学も自然に身についてくるから、なんか一石二鳥っていうか。」(KA-212)

また、次に挙げる語りでは、「語学力向上」と「専門知識の向上」を同時に語っている点では一見似ているのだが、並列ではなく、語学を習得した上で専門分野を学ぶというプロセスが見える。

(留学目的について)

「たぶん語学の勉強かなあっていう風に思ってた、やりたいことが決まったら、その分野の勉強とかになっていくかなっていう風に感じます。」(KA-232)

(留学のイメージについて)

「短期の語学留学が一つ。それから、それを踏まえた上で、専門的な学問の勉強

強となると、やっぱり年単位かな、というイメージですね。」(KO-250)

以上のように、留学目的は「語学力の向上」と「専門知識の向上」が並列したもの、もしくは、「語学習得や向上」を図った上で「専門知識の向上」に励むプロセスとして捉えられていることがわかる。このことは、学生にとっての留学はいくつかの目的が並列して構成されていることを示している。

そして、「語学力の向上」と「専門知識の向上」が、留学の目的として帰着するのではなく、将来の職業との関連で捉えている意見もあった。例えば、KA-77は以下のように述べる。

(留学のイメージについて)

「自分のしたいことを勉強するとか、そういうイメージ。うちだったら観光とかに興味あるんで、そういうこととか。一応経済学部なんで、経済、国際経済とかの勉強を、海外の学生さんと一緒にするとか、そういうイメージがあります。…中略…高校生の時は、語学だけっていうイメージで、なんか語学勉強したいけど、留学とかもしたいなって思ってたんですけど、今は語学だけの留学はもったいないかなっていう。だったら、なんかもっと将来の仕事に関係することも一緒に勉強できるような。そういう留学がしたいなって思うようになりました。」(KA-77)

このように、語学と専門知識の向上を将来の就職に関連付けている学生が少なくない（7名）。これについては、次章で取り上げる。

3-3. 語学力+異文化経験・理解

留学目的の中で「語学力の向上」に付随して語られていたのは、「専門知識の向上」の次に「異文化経験・理解」に関する内容が多かった（6名）。その代表的な例が、次の KO-249 の語りである。

「一般的なイメージだと、“いろんな文化に触れて多様な考え方を知る”というのと、“語学力を磨く”というのが、大きな二つじゃないかなと思います。僕は、英語力という部分より、多様な文化に触れるという方が大きいかな。」（KO-249）

インタビュー調査では、海外留学の経験と将来の職業をつなぐキーワードとして「グローバル人材」のイメージについて尋ねた。その際にも、以下のように「語学力」と「異文化経験・理解」が同時に語られていた。

「他者理解が多方面・多様っていう感じですかね、グローバル人材って。別に英語が喋れるとかいうのは“あまり”（最重要ではない）っていうイメージをもっていますね。」（KO-31）

「喋れるだけがグローバルじゃないと思

う。…中略…日本人であるからには日本のことも対応できるし、海外へ行った時に現地の人との調和がとれて、初めてグローバルなのかな、というイメージを持っています。」（KO-250）

「言語の習得はもちろんのこと、国際的な理解、文化とかを理解できた上でコミュニケーション力もあり、海外にいつでも臆することなくどんどん交渉とか会議とかそういう場で活躍できる人の事（をグローバル人材って言う）かなって思いますね。」（KO-22）

KO-22 が、留学経験と就職活動の関連について話していたので、その点にさらに尋ねると、以下のように答えており、「語学力」と「専門知識」を得る留学を通して、「コミュニケーション力」を磨き、それが就職活動（＝「職業に役立てる」）につながるというプロセスを提示していると考察される。

「留学経験（では）、やはり何をするにしても人との関係、コミュニケーション能力っていうのが何をするにしても大事な。そういうのが自然と身につく。それが身について、そのうえで、企業に入って働くときにコミュニケーション能力はすぐに使えるんじゃないかなーって。」（KO-22）

4. 留学と将来の職業

拙稿（2013）では、学生が留学と将来の職業を関連付けて考える傾向にあることが明らかにされた。そして、今回のインタビュー調査においては、その傾向をさらに裏付ける分析結果となった。本インタビュー調査の対象となった学生が、アンケート調査において「留学が将来の職業に関連する」と回答したのは、「非常に関連する」（8名）、「ある程度関連する」（5名）、「わからない」（1名）であった。このことから、学生は留学することが何らかの形で将来の職業に役立つと考えていることが推察できる。

そこで、インタビュー調査の対象となった学生は、将来希望する職業に就くために留学がどのような点で有利だと考えているのかについて分析した。その結果、①留学経験が就職活動を実施するにあたってシグナル効果があると考えていること、②具体的な職業ビジョンを思い描いている場合、留学目的に専門知識の向上を位置付けていること、③留学によって、多様な価値観の養成が実現されることが明らかになった。以下、学生が抱く留学と職業との関連性について詳しくみてみよう。

4-1. 留学のシグナル効果

上述のように、学生は語学力「 $+ \alpha$ 」（専門的知識もしくは異文化理解）を身につけ、将来的には自身の職業に役立てたいと考えている。この点は、自身が就職活動する上でも重要だと捉えているようである。以下はその

例である。

「やはり、留学したってということによって、ある程度の語学力のアピールにもなると思いますし、ま、期間にもよりますが。あと、海外での経験っていうのはやはり、経験していることによって経験知が即戦力として使える人材としてみなされるんじゃないかなと思います。」
(KO-22)

留学によって研磨した語学力は、その経験と相まって、就職活動のアピール材料になると KO-22 は述べている。スペンス（1973）のシグナリング理論では、高い学歴が高い能力を持っていると人に知らせるシグナルになることを想定しているように、KO-22 は、留学経験が即戦力として使える人材だと人に知らせるシグナル効果を発していると考えているのである。留学がそのようなシグナル効果を発するのは、留学によって高い語学力を獲得しているであろうこと、留学での経験が職業の上でも活用できる何かをもたらすと考えているからである。

4-2. 具体的な職業ビジョン

一方で、留学を単なる就職活動でのアピール材料にしようとするのではなく、留学によって将来の職業に直結する専門知識を獲得しようとする意見もあった。

「自分が心理にかかわる仕事をして、しっ

かりその対象の人に関わるとしたら、自分的には留学はあった方がいいんじゃないかとは思いますが。…中略…海外に出て自分と違う人を理解するっていうことをもっとしっかり学びたいと思って。」(KO-31)

「最終的には、その、海外の JICA とか 国境なき医師団とか、そういうので働けるためにも、語学を勉強してスキルを身につけてっていう面で留学と繋がっています。」(KA-212)

前者の KO-31 は、心理関係の仕事に就きたいと考えており、将来のクライアントとの関係性を構築や、クライアントのために有効なカウンセリングを提供するために、留学を通じて異なる価値観を持つ人との交流を深めることが重要だと考えている。後者の KA-212 は、国際協力の分野で働きたいと考えており、そこで必要とされる語学やスキルを、留学を通して獲得しようとしている。彼らのように、比較的具体的な職業ビジョンを有している場合、留学に専門知識の向上を求める傾向にある。

4-3. 多様な価値観の涵養

留学先で積極的に活動をし、多くの人と交流することは、語学力や専門知識の向上だけでなく、多様な価値観を涵養することにもつながるだろう。前述の具体的に表明できる「語学力」や「専門知識」を職業と関連付けるの

ではなく、日本では得られない海外経験が、職業において何らかの役に立つと考えている学生もいる。

「短期（留学）に行った後に、長期（留学）に行った時に気がついたんですけど、やっぱりはじめての海外留学が長期だった人に比べたら、出だしがまだ英語環境、しゃべれるかどうかじゃなくて、慣れているっていうのがあるんで、突然海外行って、営業しろみたいにいわれたときに、少しでも海外経験があれば、多少の慣れって言うのがあると思います。」(KO-115)

「そのひとつの経験も、どの仕事にも繋がるかなーとは思いますが。」(KA-77)

「留学は…もし大学4年生とかでもし留学行けたら今までの日常から解放されて非日常の中に入れられるわけじゃないですか。自分を見つめ直せる機会にもなるかなと思って。本当に自分のやりたいことが、留学で決まるかわかんないけど、英語も培われると思うし、自分のことを見直す時間も与えられると思うし。なんか、異文化の中で体験ができたならいろんな価値観が見つかると思うし、そしたらまた自分がまた一歩でかくなるんじゃないかなーみたいな。たぶん、困難はめっちゃあると思うんですけど、それ以上にプラスのものが大きいのかなっていうイ

メージはあります。」(KO-187)

「4-2. 具体的な職業ビジョン」では、比較的具体的な職業と関連付けて語られていたのに対して、「多様な価値観の涵養」と職業の関連では、漠然とした職業ビジョンが想定されている。職業ビジョンが具体的ではない分、どのような職業・業界でも活かせる資質・能力を留学で経験できると想定しているのだろう。

このように、学生が考える留学と将来の職業の関連について分類すると、留学経験は、「シグナル効果」があるということ、「具体的な職業ビジョン」が専門知識の向上を高めるとということ、「多様な価値観を涵養すること」に分けることができる。先行研究でも指摘されているように、多くの学生にとって、留学することは就職活動開始の出遅れになると考えており、それが留学の懸念材料の一つとなっている。しかしその一方で、学生は留学することが就職活動に対しては好影響があるとも考えており、留学が将来の職業に有利と考えていることが明らかになった。池田(2011)が留学を促進するための具体策の一つとして留学のメリットを明らかにすることを提案しているように、大学は、学生が留学を通じて得たスキルが就職活動や今後のキャリアにおいて有利に働くことを示すことが必要である。この点について、次節では学生にとって留学経験者との交流がどのような影響を与えるのかを見ていこう。

5. 身近な存在者たち

インタビュー調査では、身近な留学経験者に接することで留学に関するイメージがより具体化され、留学への志向が高まる様子が伺えた。大学の先輩やサークル仲間などの身近な経験者の実体験を聞いたり、または外国人留学生と交流したりして、留学への刺激を受けているようである。

5-1. 身近な留学経験モデル

まず、学生が挙げる留学への刺激を受ける身近な存在として、友人や先輩、サークル仲間などの留学経験者がいる。彼らの話を聞いて触発されたり、留学後の姿を見たりして憧れに似た感情を表している。その代表的な語りを以下に挙げよう。

「その人たちに近づく感じのイメージだったんですよ。(留学している友人のfacebookなどを)見ていて、やっぱり羨ましいなあって思いながら。」(KA-207)

「行く(留学する)ことによって、やっぱり学術的な研究水準が上がるっていう人もいるみたいなので。院生の方で留学された人の話を聞くと、やっぱり自分も留学しないといけないかなあと思わされますね」。(KO-81)

「漠然と留学はするって大学で思ってたんですけど。海外行きたかったし、興味

あったから。でも、先輩の話とか聞いたら、やっぱり目的持たないとだめだになって。いろいろ考えるようになって、自分なりに考えようかなって思ってきたところです。」(KO-187)

KA-207は友人への羨望が留学意欲へと繋がり、留学経験のある先輩に接したことで、KO-81は専門知識を高める意欲をもち、KO-187は留学の目的意識の見直しをはかるに至っている。このように、同世代で同じ教育環境にいる先輩や友人の姿に接することが、留学への羨望を募らせ、より具体的に留学について考えるようになる効果があるといえる。

先行研究では、留学することが就職活動に不利になることを危惧し、学生が留学を躊躇しているという指摘もある(船津・堀田2004、井口・曙2003)。しかし、身近な留学経験者に接することで、そのような躊躇を払拭する可能性を示す発言もあった。

「たぶん、そう(留学によって卒業が遅びたとしても、将来には大きく影響しない)。先輩を見て、すごく自分のやりたいことをやって、そうになっているわけだから、それに対して全く何も感じてないし。逆に私には、すごいいきいきしているようにも見えました。」(KA-232)

これは、留学経験者である先輩を見て、留学による就職活動のリスクは大きくないと判

断している発言である。KA-232は、将来発展途上国で働きたいという目標をもっている。KA-232のように目標をもち、留学で得るものを具体的に描くことができている学生は、留学によって卒業や就職が遅れることは大きな問題ではないと考える傾向にある。それは、留学を納得の行く就職へ結び付けられた先輩等の事例を見ているからと言える。

5-2. 外国人(留学生)との交流

留学を促進するきっかけとなる存在は、海外留学を経験した日本人学生のほかに、日本で学ぶ外国人留学生たちや、海外で出会った外国人たちを挙げることができる。例えば、以下に引用する学生の意見は、そのことを説明している。

「自分の高校に、留学生が来たんですよ。そういう人たちに触れ合ってみて、なんか、自分達と考え方が違うなあ、もっと、こういう人達のこと知ってみたいなーって思って。で、留学のことを考え出しました。(フィリピン出身の大学での友人は)すごくおらかで、自分の意見も、とっても広く、視野が広いです。で、自分の意見も思ったことは素直に言って。何というか、とても楽しそうに毎日送っているように見えます。」(KA-72)

「去年、ポーランド人と1ヶ月住んでたんですけど、一緒に。放課後に、「国境を越えて遊びに行くなんて余裕だよ」み

たいなことを言って。おーって、留学ってそんな感じなのかなと。ヨーロッパに行ったらそういうことも可能なのかなと思って。いろんな人と繋がれる場所なのかなとか。めっちゃ漠然としてますけど。なんか、面白そうだなと思ってます。」(KO-187)

このようにいずれの場合も、外国人(留学生)との出会いを通じて、新たな価値観に触れている。そして、外国人(留学生)の背景にある海外の文化や価値への興味に繋がっている。

また、外国人との出会いや交流が、留学目的で最も多かった「語学力の向上」へと導く様子も伺えた。

「何か自分が伝えたいことを伝えられる人にならなきゃ、海外の人と本当の親友とか、会いたい友達に会えないのかなと思って。友達、そうやって思える親友みたいな人を作りに行きたいし。勉強の面ではやっぱり教育を学びたいっていうのと、遊びっていうか。海外を楽しむ面ではそういった友達に自分の話したいことを話したい、話したいと思える友達を作って英語のモチベーションに繋げようかなって思います。」(KO-187)

外国人との交流では、同じ大学に通う外国人留学生との接触が圧倒的に多い。次に、高校や大学の研修プログラムで海外へ行き、そ

こでの外国人との交流が印象深いようである。文化の違いを感じることはあるものの、そこから受ける刺激よりもむしろ、勉強への取り組み方や将来への展望、知識の幅の違いを感じ、同じ大学生として考えさせられたり、触発されたりしている様子が読み取れる。そして、さらに理解し合いたいという気持ちが、具体的な留学のイメージを導いている。

おわりに

アンケート調査結果(拙稿 2013)でも重要性の確認された「語学力」は、それが単なる外国語の運用力としての意味で重要視されているのではなく、「専門知識」や「異文化経験・理解」を養う基本要素として必要とされていることが分かった。これは、留学を促進するためには、単に語学力の強化・向上に向けて学生をサポートするだけではなく、専門分野を考慮した語学プログラムや異文化理解プログラムを取り入れたサポートが必要であることを示している。つまり、語学だけではない人間関係を構築するスキルを含んだコミュニケーション力の向上を想定したプログラムの提供が必要と言える。

また、就職活動や将来の職業において、留学経験が有利に働く場面は少なくない。それは、就職活動において留学経験がシグナル効果を発することや、留学によって高める専門知識を将来に活かそうとする学生の存在によって裏付けられる。池田(2011)が提案するように、留学のメリットを提示し、それらが自身のキャリア選択とどのように関連する

のかを示す必要があると考えられる。

そして、将来の職業ビジョンが明確ではなくとも、留学経験そのものが有益だと考えている学生も少なくない。このような、一見曖昧に見える有益性も、実際の留学経験者との接点があることによって、より具体的な留学のメリットを得るきっかけになりうる。留学を検討している学生に、経験者の留学を実現するまでのプロセス、留学中の経験を通じて得たスキルをどのように活用できるのかを示すことで、留学促進のきっかけを提示できる。留学が就職活動や将来の職業を選択する上で、どのようなメリットがあるのかを実際の経験者との交流を通じて提示することは、留学志向への動機付けとしても機能すると期待できるのである。河合（2009）は、留学への「動機付け」を促す制度の必要性を提案している。本調査結果より、留学への動機づけとして、学生が入学してから早い時期に将来のキャリア展望との関連で留学の案内を進めることが重要であると指摘できる。

以上の結果を踏まえて、本稿では学生のキャリア展望をもとにした留学支援制度を提案したい。すなわち、①専門分野を考慮した語学プログラムや異文化理解プログラムを取り入れた、コミュニケーション力の向上を想定したサポート・プログラムの実施、②就職活動もしくは将来の職業における留学の有益性を示すこと、③留学を促す過程として、留学経験者や外国人留学生などの等身大モデルケースとの接点を提供すること、である。自らの留学体験を披露する大学の先輩や身近な

同世代の姿を見せ、彼らが留学で得たもの、とりわけ、専門知識やスキルの向上、それらの知識やスキルを得られた海外の大学の環境を紹介することは、留学への関心を持ちながらも実際に踏み出せずにいる学生の背中を押す有効な方法であろう。それは、留学と卒業（就職）の狭間で悩む学生にとっても効果を期待できる。

本稿は、これからの留学について考えている学生を対象にしてインタビュー調査を行った。今後は、留学帰国者・卒業生を調査対象に広げ、留学成果とキャリアとの関連について考察を深めていきたい。

参考文献

- 井口泰・曙光（2003）「高度人材の国際移動の決定要因—日中間の留学生移動を中心に—」『経済学論究』57（3）：pp. 101-121。
- 池田庸子（2011）「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか—」『留学交流』7月号、Vol. 4：pp. 1-10。
- 岩城奈巳・野水勉（2010）「名古屋大学生と海外留学—全学教養科目「現代世界と学生生活」課題レポートから見えてきたもの—」『名古屋大学留学生センター紀要』8：pp. 17-22。
- 河合淳子（2009）「海外留学の動機と制度的制約—日本人学生対象アンケート・インタビューの考察」京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第3回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター：pp. 105-120。
- 河合淳子・野口剛（2010）「日本人学生の留学志向に関する実証的研究—京都大学学生アンケート・インタビュー調査にみる「留学志向の三層構造」—」『留学生交流・指導研究』12：pp. 69-81。
- 正楽藍、杉野竜美、武寛子（2013）「大学生の海外留学に対する意識の形成要因—日本の四年制大学における比較分析—」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』第4号：pp. 19-45。
- 高濱愛・田中共子（2009）「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」異文化間教育学会紀要編

- 集委員会編『異文化間教育』30：pp. 104-110。
- 田中梓(2010)「若者は本当に内向きになったのか？—日本人の英国留学とブリティッシュ・カウンシルの留学促進に向けた取組について—」『留学交流』2010年7月：pp. 14-19。
- 野口剛(2009)「京都大学生における留学志向の三層構造とその規定要因」京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第3回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター：pp. 91-104。
- 堀田泰司(2010)「日本人のアメリカ留学離れと21世紀型アジア教育交流の可能性」『留学交流』2010年7月：pp. 2-5。
- 船津秀樹・堀田泰司(2004)「海外留学に関する意思決定問題」『商学討究』55(1)：pp. 89-108。
- 森宏一郎、児玉奈々(2012)「滋賀大生の留学志向に関するアンケート調査分析」滋賀大学経済学部『滋賀大学経済学部 Working Paper』No.174：pp. 1-31。
- 文部科学省(2011)グローバル人材育成推進会議『グローバル人材育成推進会議 中間まとめ(2011年6月22日)』
- 文部科学省 HP「日本人の海外留学状況(2013年2月)」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/_icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf(最終アクセス日：2013年9月28日)
- Spence, M., (1973) "Job Market Signaling," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 87, No. 3. (Aug., 1973) : pp. 355-374.

注

- 1 これら3要素は、産学連携による「グローバル人材育成推進会議」で提唱されたものである。
- 2 例えば、以下の先行研究が挙げられる。
河合淳子・野口剛(2010)「日本人学生の留学志向に関する実証的研究—京都大学学生アンケート・インタビュー調査にみる「留学志向の三層構造」—」『留学生交流・指導研究』12：pp. 69-81。；近森高明(2006)「留学志向の三層と留学支援のあり方—積極派・消極派・浮動層のプロフィールを手がかりに—」『京都大学における国際交流の現状と可能性—第2回アンケート調査報告書』京都大学国際交流センター：pp. 43-56。；船津秀樹・堀田泰司(2004)「海外留学に関する意思決定問題」『商学討究』55(1)：pp. 89-108。；松原敏浩・薛曉梅・李晨・姜輝(2008)「大学生の留学意思決定に及ぼす要因の分析(2)—日本の大学生と中国の大学生の比較を通して—」『経営管理研究所紀要』15：pp. 87-99。
- 3 例えば、以下の先行研究が挙げられる。
乾美紀(2011)「大学連携を通じた国際教育交流の取り組み—学生の海外派遣プログラムの評

価を中心に—」『神戸大学留学生センター紀要』17：pp. 19-42。；高濱愛・田中共子(2009)「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」異文化間教育学会紀要編集委員会編『異文化間教育』30：pp. 104-110。

- 4 「大学院試験などの必要性に迫られること、同じ研究室に自分の興味関心と合致する形で交流できる留学生がいること、国際会議で自分と非ネイティブの英語運用能力の差に衝撃を受けたこと」(野口 2009, p. 104) といった経験のことを指している。
- 5 拙稿(2013)
- 6 アンケート調査の全回答者数は、神戸大学 325 名(男 185、女 140)、香川大学 274 名(男 140、女 133、不明 1)である。
- 7 これらの層は、アンケートの「留学の予定はありますか?」という問いへの選択回答によって分けている。選択回答のうち「A. 留学が決まっている」にチェックを入れた者は「決定層」、「B. 留学したいと考え、何らかの準備をしている」=「準備層」、「C. 留学したいと考えているが、特に準備はしていない」=「未準備層」、「D. 留学について考えていない/留学するつもりはない」=「無関心層」という分け方を採用した。
- 8 アンケート調査で明らかになった点は、以下の通り。①留学を将来の職業と関連付けて考える、②留学を実現する上で、外国語運用能力と留学費用が問題と考えている、③大学の制度として、奨学金と単位認定制度の充実や、外国人留学生との交流の機会を求めている。
- 9 層別(決定層、準備層、未準備層、無関心層)は、アンケートで留学予定について尋ねた回答をもとに分けている。「決定層」=留学が決まっている、「準備層」=留学をしたいと考え何らかの準備をしている、「未準備層」=留学をしたいと考えているが特に準備はしていない、「無関心層」=留学について考えていない or 留学をするつもりはない。

Studying Abroad Support System based on University Students' Career Perspectives — An Interview Survey at Universities in Japan —

SUGINO Tatsumi^{*}
TAKE Hiroko^{**}
SHORAKU Ai^{***}

Abstract

The concern with the studying abroad of Japanese students has been growing in recent years. In this background, there is the fact that number of people studying abroad has decreased, although the educational system to cultivate global human resources has been required from both business community and academic societies.

Over the past decade, several studies have been made on the students' perspectives of studying abroad and the educational system toward internationalization of Japanese universities. Several researchers and universities have done questionnaire surveys and statistical analysis to know students' perspectives of studying abroad. However, little is known about their internal matters. It is necessary to make clear how students' perspectives are formed for more consideration about effective educational system to promote their studying abroad.

The purpose of this paper is to comprehend the Japanese students' perspectives of studying abroad. Then we will present the ideas of university system to promote the students' studying abroad.

For this purpose, we have conducted an interview survey at Kobe University and Kagawa University in this March and April. As a result the following were obtained. Firstly, the importance of language skills is reaffirmed. The skill means not only language use, but also communication skills. Secondly, students believe that it will help

* Researcher, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University

** Assistant Professor, Center for Cooperative Teacher Training Development, Aichi University of Education

*** Assistant Professor, International Office, Kagawa University

their future work. Thirdly, it is important to have a role model for studying abroad and opportunities to interchange with foreigners.

The first section describes the argument of the previous studies. The second section outlines the method of our interview survey and analysis. The third, fourth and fifth sections analyze the survey results. Lastly, we would like to suggest the ideas of studying abroad support system based on university students' career perspectives.